

ニューノーマル時代における授業設計・学習環境を考える

岩 崎 千 晶

1. はじめに

関西大学の教育推進部教育開発支援センターで教員をしております岩崎千晶と申します。専門が教育工学でして、大学教育をフィールドに学習環境デザインを研究しております。学生も参加されており、教育開発支援センターのことを、ご存じない方もいらっしゃるかなと思って、少しお話しさせていただきたいと思います。関西大学教育推進部教育開発支援センターでは、大学全体の教育の質を向上させていくことがミッションとなっています。

マクロレベルでは、教育の制度や方針等を決めていくときに大学執行部とともに考えたり、入学時調査とか卒業時調査といった調査をベースにして、今後の教育をどう展開していけばいいのかということを考えるIRを実施したりしています。

ミドルレベルでは、カリキュラムマネジメントのお手伝いがあります。学部の中の教育は学部の中で決められますが、学部から教育動向について話してほしいと依頼されることもあります。例えばオンライン授業、初年次教育、学習補助者の導入を新しく取り入れるとき、などで

ミクロレベルでは、FDのセミナーを実施したりですとか、あと先生方が授業のことについて意見を聞きに来てくださるので、その対応をしたり、授業をどういうふうにしていったらいいのかみたいところを扱う「アクティブラーニング読本」等の冊子も発行しています。教育開発支援センターで配布していますので、皆さ

んもご関心があれば、手に取ってご覧ください。

2. 本日の流れとコロナ禍におけるオンライン授業の導入

まず2020年度以降の大学教育をふりかえりながら、オンラインの授業設計や学習環境を取り上げて実質的な話をしていきたいなと思っています。

従来、ほとんどの大学はオンラインで単位を出せる体制を整備していませんでした。関西大学では、LMSは導入していたんですけども、利用している先生は60%ぐらいでしたし、講義配信システムというのがありましたが、同時アクセス数が100でした。これだと3万人の学生に対して授業を配信するというのが難しいという状況がありました。

学生もオンライン授業だけで単位を修得するというを経験してきておりませんでしたし、自宅のICTの環境にもばらつきがありましたので、本当に緊急の遠隔教育をやっていきました。それぞれ皆がいいと思う形、できることを着実な形でやっていく形で2020年のオンライン授業が開始していたかなと思います。

そういうときに、先生方が授業を円滑に進めることができるように、また学生向けに学習支援としての取り組みが、多くの大学の大学教育センターにおいて実施されてきました。例えば先生方向けにどんな活動が行われたのかなというのを見ていきますと、一番よくあるのがFDセミナーですね。関西大学の場合も3月末から

FDセミナーを始めましょうという話になったんですね。でも春休みだったということもありまして、「先生方は来てくださるかな」という懸念はありましたが、いざやってみると多くの先生が来てくださって、対応し切れないぐらいでした。それで個別対応は難しいということになりましたので、セミナーを翌日から開くような形で対応したんですけれども、そういったことはどんな大学でもされていたかなと思います。

セミナーをしたらそれを配信するようになり、あとは役立つサイト、スライド資料を作成したりしました。先生方は優秀ですので、教材を見ながら自分でオンライン授業をやっている先生もたくさんおられるからです。あと本学ではなかったんですけれども、例えば東京大学ではオンライン授業を支援するTAを教育して導入するみたいなこともされていました。このあたりは大学院生の数も全然違うので、なかなか大学によってできることと、できないことというのはあったかと思えますね。

オンライン授業を進めていき、ある程度時期が経つと、大学として適切な支援ができていのかを調査していかなければならないというところで、大学ではアンケート調査により学生に様子を聞くことをされていたかと思えます。

また、学生向けの支援ということで考えますと、Zoomは初めてという方もいらっしやったので、セミナーを行ったりですとか、あとはちょっと学生生活に関して相談を受け付けることをオンラインで実施するというのがあったりしました。

こういったオンライン授業や支援は、最初は本当に試行的でしたが、だんだんと定着するステージに移行していると思います。

新しいものが入ってきたときに、テクノロジー・プッシュ (Technology-Push) やデマンド・プル (Demand-Pull) という考え方があるかなと思うんですけれども、今回の場合はデマン

ド・プルで、オンライン授業をするというニーズがあって、一気に広がっていったかなというふうに思いますね。ただ、緊急のオンラインだったので、学生も先生方も最初のころは非常にご苦労されたのかなと思います。しかし振り返ってみると悪いことばかりではなく、これまでの授業実践を振り返ったり、学生だったら自分の生き方というのを考えたりする機会にもなったと思うんですね。

教員としては、今後どんなオンライン授業をしていったらよいか、大学としてオンライン授業を今後どう展開していくのがよいかを考える機会になったのではないかと私自身は捉えています。

3. 授業設計の基本

オンラインの授業設計を取り上げます。まずここで言いたいことは、対面とオンライン授業の授業設計の基本は同じということです。次に、授業設計の基本は変わらないけれど、通常の授業ではやっていないようなオンラインならではの配慮というのは必要であるということです。その一つが授業の方法で、もう一つが学生のケアということになります。これらについて話して、最後にオンラインでの学習環境についてもお話します。

授業設計の基本は、先生方はよくご存じだと思うんですけれども、対面であってもオンラインであっても授業設計の基本は変わらないということですね。授業を設計されるときの基本的な三要素として、授業の目標、教育の方法・内容、評価方法があります。授業を設計するときに、最初に考えるのは授業の目標ですね。この授業が、15回終わったら学習者にどんな力がついていけばよいかということを考えていきます。次に評価方法ですね。これは授業の目標を達成したかどうかというのを判断するには、どんな評価方法が望ましいのかということ

を考えます。最後に授業の目標を達成するには何をどう教えていけばよいのかということで、授業の内容とその評価の方法というのを考えます。ただ、これらは行きつ戻りつしますので、1、2、3の順番で考えないといけないということではありません。対面授業からオンラインの授業に移行していったときに関しては、まず授業の目標というのとは基本的には変わらない。対面だろうがオンラインだろうが変わらないんですけれども、評価の方法は、テストができないというのが一部あったりしますので、この辺は少し変えないといけない可能性もあるということですね。教育の方法に関しましても、オンラインで配信するので、変わってきます。

そして、この三要素についてお話していきますが、まず授業の目標から見ていきます。能力というのは階層性になっていると思いますので、どの能力を育てていくのかなというところを整理していただくとよいかと思います。例えば「情報モラル教育論」という科目で考えてみます。「情報モラルにどんな種類があるのかを説明できる」というところと、「情報モラルの教材を活用して学習指導案をつくり、模擬授業をする」ことを目標にした場合だと、能力の階層が違ってくるんですね。「情報モラルにどんな種類があるのか」というのを説明できる」では、「知っている・できる」のレベルで、「指導案を自分でつくってみて模擬授業をする」では、「知識の有意義な使用と創造」となります。両方とも授業の中で育みたい能力だけれども、そこには階層性があることがわかります。

授業設計では育みたい能力に合わせて、教育の方法等を選んでいきます。例えば「情報モラルにどんな種類があるのか」というのを説明できること」を目指す場合、オンデマンド型による知識習得型の教育の方法が考えられますが、「学習指導案をつくって模擬授業をする」だと、オンデマンド型では少し難しいぞとなっ

すね。こういう場合ですと、例えば対面、あるいはリアルタイム型で学生同士がピアレビューしたり、教員がフィードバックをしたりすることが入ってくるわけなんです。繰り返しのなりますが、授業の目標に合わせた適切な教育の方法を選んでいくということがとても大切になっていきます。

同様に、育みたい能力に合わせて評価の方法も選んでいくということですね。例えば「情報モラルにどんな種類があるのかを説明できる」ことが達成できたのかを判断するためには、LMSの小テストを使って評価することが実施しやすいと思うんですが、模擬授業や学習指導案作成はテストじゃ難しいぞというところになってくるんですね。この場合は、実際に模擬授業の様子をみんなでルーブリックを使って評価したりですとか、教員が指導案を確認して、ルーブリック評価をしたりすることなどが考えられます。

このように、授業設計の基本で考えると、目標に合わせて教育の方法、評価方法を選んでいくというのは、オンラインであっても対面の授業であっても変わらないということになります。ただ、目標を設定するときにいくつか、やはり注意点がありまして、これは目標設定する前に押さえておくべきポイントというところですね。それは学習者がどんな前提条件を備えているかということですね。今まで学んできた関連知識とか、どの程度分かっているのかとか、あとオンライン授業だとしたら学習方法の好みとして、こういったことが挙げられるのかとかいうところをおさえておく必要があるかなと思います。

関連知識の把握をしていこうと思えば、LMSのアンケート機能が使えますね。例えば教育方法技術論の授業では授業冒頭に、授業で扱う用語「インストラクショナル・デザイン」「ルーブリック」等のキーワードの認知度について調査をしています。「初めて聞いた」とい

う人が23人で最も多いなら、そこは詳しく話していく必要があるとか、「教えることができる」「知っている」人が多いなら、説明はほどほどにして演習にするなど、教育の方法・内容を決めていくことができる判断基準の一つになります。

4. オンライン授業の種類

次にオンライン授業の手法と注意点をみていきましょう。

(1) 同期型：リアルタイム型授業

オンライン授業といっても種類があるんですね。同期型と非同期型と混合型というのがあります。まず同期型というのはZoomとかを使って授業をリアルタイムですすめていく形ですけれども、同期で授業をするというのは、対面に次いで「今ここにいる」というプレゼンスが保てるものだというふうに言われているものです。

教室にいると周りに学生もたくさんいるし、前に先生もいて話しているところで、そこで「勉強する」というプレゼンスがあると考えます。一方、オンラインですと、例えば家の中にいるので、部屋にいるネコを触ったりする子がいたりですとか、ちょっと気が散ることもありますね。自分の家にいるので、よい意味でリラックス感はあるんですけれども、一方で勉強する雰囲気を持っていくというのが難しい場合もあるかと思っています。

リアルタイム型の授業は対面に次いでプレゼンスというのを保てると思います。しかし一方で緊張感もあるんですね。ですから、学習者同士の意見交換なんかをする場合は、学習者が安心して自分の本音を話し合えるような環境をつくるのが大事になってきますね。例えばアイスブレイクを行って、ちょっと学習者同士で話し合うとか、そうした環境をつくるというのが結構大事なかなというふうには思います。あとは撮影とか録画というのを禁止しますとい

うところをLMSに明記したりします。ほかに、リアルタイム型でグループワークになると何をやってよいのか分からなくなってしまう子がいたりするので、学習のガイドを示し、何をするのか、このワークの目標は何なのかというところをちゃんとみんなでも共有する。役割分担も有効ですね。自分たちで進めていけるように会社とか書記とかそういった役割分担をしてやっていくというようなところが、学生同士で進めていく環境を事前につくっておくというのが大事になってくるかなと思いますね。

また班ごとの活動になると、教員が各グループでどのぐらい進んでいるのかなとか、どんな話をしているのかなというのが少し見えなくなってきてしまうので、例えばOffice365のPowerPointの共有機能を使って、どこまでできているのかなというのを見ながら、適宜グループに介入することも必要になってくるかなと思います。学生が活動記録をつけることで、教員が学習者の議論や活動をフォローしていく際に利用できたりします。教員一人でそれは難しいというところもあったりしますが、大学でTAやLA制度を導入していますので、学生スタッフをうまく活用するという手もあるかなと思います。

(2) 非同期型：オンデマンド型授業

オンデマンド型授業では、講義映像の配信と学習活動になりますね。オンデマンドの場合は、90分が終わったときに、どんな力がついていけばよいのかをある程度クリアにした上で映像をつくっていくとよいかと考えます。もちろん先生方は科目の中で、今日ここまでいこうと考えておられますが、扱う内容によっては2回、3回まとめて一つの区切りというところもあると思います。それらを小さなステップに区切ります。90分の映像をずっと見るのは学習者の集中力が続かないこともあります。

学生はYouTubeの動画を見ていたりします

ので、1本1本が短く、それに慣れているので、90分集中させるのは結構難しく、20分ぐらいで1回切れるといいかなというふうに考えています。それより短い時間の動画を作るのは、大学の教員にとっては難しいかなと思います。一度に撮ってしまう場合は、「ここで一旦映像を停めて、ワークを実施してください。終わりましたら再生をしてください」等と話していく方法もあります。

ほかにも、事前に映像の中で何か問いかけをしてもらおうですか、あるいは視聴前に「どんなことを考えながら、どこに注意して視聴すればよいのか」を提示していただく。「情報モラル教育論」だと「情報セキュリティに関する映像を視聴し、どんな危険性があるのかを説明できるようにしてください」、「中学生に情報モラルについて指導する場合、指導のポイントはどこにありそうなのかというのを考えながら見てください」等と、ある程度、教員から視聴するポイントを提示します。また、映像を見ながらノートをとって、そのノートを提出してもらおうという先生もおられますね。

また、オンデマンド授業とひとくりにされていますが、実はオンデマンド授業は幅広いと考えています。例えばホワイトボードを書きながらお話される先生もおられますし、スライドを提示しながら実施するというふうな方もおられますし、顔なしで音声だけというふうな先生もおられます。スライドもいろいろなタイプがあったりしますね。先生がスライドをつくれるというところはあるかと思いますが、教科書を撮影したもの、テキストベースでの資料というのものもあるし、あとは何か穴あきのスライドを準備し、講義をみて、学生が記入できるようにしている先生もおられます。どのスタイルが授業目標を達成するのに適しているのかなというところは、おさえておいたほうがよいかなというところでは。

今後、対面授業と併用する形でオンデマンド授業をする場合は、どのようなオンデマンドの授業を提供しているのかというのを学部単位である程度共通認識を持っておく必要があります。例えば、講義20分の映画を見て、学習活動（小テストをやったりとかワークシート記入）を10分する活動を3回行います。そして次の授業の冒頭で、学習者が実施した学習活動についてフィードバックの動画を入れるというオンデマンド授業があります。同じオンデマンド授業として、教員が90分話すというものもあります。各科目にはそれぞれ授業の目標があるため、どの方法がよいというわけでは決してないですが、カリキュラムとして考えて、どういう方法が望ましいのかは十分に検討する必要があります。

(3) 混合型

混合型は、対面授業とオンライン授業を組み合わせたものになります。ハイブリッド型ともいわれていますが、ブレンド型とハイフレックス型と分散型に分けられます（田口2020）。

初年次教育でレポートの書き方を学ぶ授業について考えてみましょう。まずブレンド型は、1回目はオンデマンド型授業で「レポートと感想文の書き方の違い」を学びます。実際のレポートを書いてピアレビューとなると、なかなかオンデマンドでは難しいので、第5回目は対面で学生が執筆したレポートに対してピアレビューをしたり、教員からフィードバックをしたりという対面とオンラインの両方を取り入れる、これがブレンド型と言われているものです。

次にハイフレックス型ですけれども、例えば1回目は対面ですけれども、まだ学校に来られない人もいるということで、対面授業と同時にリアルタイムで配信することをハイフレックス型といいます。例えば、私の授業では、入国できない留学生が授業を受けておられたので、

ハイフレックス型で授業をしていました。画面の前には留学生がいて、教室も学生がいるという授業ですね。

分散型は、例えば教室が狭く、全員授業に参加することが集めるのが難しいという場合に、1回目はオンデマンド型で授業をするが、4回目はAチームとBチームに学生を分けて、Aチームは対面で授業をするけれども、Bチームは先にオンデマンドで講義を受けておいてもらう。第5回目はその逆にしますというのが分散型です。

関西大学の場合は250人以上の授業は原則オンデマンドで、あとは対面で行われていると思うんですけども、実際は学生や教員の事情があり、大学に行けないという状況もありますので、ハイフレックス型も行われています。ただ、教員一人でハイフレックス型授業をするのは、ネット上と教室両方の学習者に配慮しなくてはいけないので、アクティブラーニングをしていく中できめ細かいサポートをするには、TAやLAのサポートがあるとよいでしょう。

5. 評価方法

評価では、目標が達成できているのかを判断できる方法を選びます。2020年のオンライン授業時は評価に関しては、例えば「用語の確認をする」小テストでは、「正解が学生の間で共有されると困るので、テストをどうすればよいか」という意見がFD相談会で寄せられました。従来の授業でやっていた評価がオンラインだとできないと困るというご意見が多かったです。方法としては回答時間に制限を設けることや、問題を通常の3倍ぐらい用意し、ランダムに出題をするような形をとったりすることもあります。関西大学外国語学部の山崎直樹教授は知識やスキルに加えて、態度や気づきを重視した到達目標を重視されており、「あなたが理想とする日曜日の過ごし方を教えてください。何時何

分、入浴のような簡単な形式で私の理想の日曜日という日課表をつくり、それを読み上げて録音し提出してください」という課題の提示をされ、誰が答えても同じ回答にならないような学習課題を提示されています（山崎2021）。さらに山崎教授はこの学習課題を評価するためのルーブリックを準備されており、学習者が自分自身でその目標をクリアできているかどうかを確認できるようにされていました。

評価方法は、授業の目標が達成できたのかどうかを判断することができるものを選ぶ必要はありますが、オンラインであるがゆえに、通常の授業と同じように評価できないため、評価の対象や方法について十分検討する必要があります。

6. 学生のケア

授業設計の基本は対面授業であれ、オンライン授業であれ大きく変わらないことはすでにお話ししましたが、オンライン授業では通常の授業に加えて、学生のケアについては十分に配慮する必要があると考えています。関西大学教学IRプロジェクトでは、2020年春学期にオンライン授業に関するアンケートを実施し、学生が抱える課題について調査をしました（関西大学IRプロジェクト2020）。そこには「課題が多い、先生の指示が分かりにくい、先生に質問がしにくい」等、教員に対する意見もありました。ただその後の調査でこれらの項目は改善傾向にあります。例えば、「先生の指示が分かりにくい」という課題があげられていますが、教員が学習を進めていく上で、どういう手順で学習をすすめていけばよいかという学習ガイドを提示する教員が増加していると思います。また、「質問をしにくい」という課題に対してですが、質問には「授業内容や専門教育に関わる深い質問」から「聞けばすぐにわかる質問」というのがあると思います。オンライン授業では「聞けばすぐにわかる質問」というのを、隣に座る学生に

聞くことができず、困った学生がいました。しかし、ここも教員がオンライン授業時に質問する時間を取ることで、解消されてきています。

また学習者に関する課題では「集中力が続かない、友達と一緒に学べず孤立感を感じる、勉強のペースをつかみにくい」といった結果がアンケートから出てきています。これらの課題を全てオンライン授業だけで解消するというのは、無理があるんですけども、対面の授業との併用でこのあたりも改善されてきているのかなというふうに思います。

ただ、配慮しないといけないところは「学生がつかずいている」となると、どこにつかずにいるのか、というのを教員の中で把握しておく必要はあります。例えば、やり方でつかずにいる人も多かたりするんですね。「課題が出たけれど、何をしてよいのかが分からない」という課題のやり方、「扱っている内容が難しい」という内容に関する躓きもあると思うんです。ほかにも「学び方」や「意欲」に関する躓き(石井2020)があり、それぞれ違ってきます。それは教員が課題の出し方、課題の出来、学習者からの声を聞く場から判断をしていくという必要があります。こうした躓きに対して、教員からフィードバックをかけていくことは重要になっていくと思います。実際、関西大学の教学IRプロジェクトのアンケート調査の結果でも出ておりましたが、学生からはフィードバックがあることが学生に好評という報告がありました(関西大学教学IRプロジェクト2022)。学生の躓きを把握するためには、小テストをしたりですとか、振り返りレポートをしたり、学生の頭にある内容、分かっていることをアウトプットしてもらって、適宜フィードバックしていただく方法があります。あるいはすごくよい意見を紹介していただくと「受講生にこんなすごい意見を書く子がいるんだ」ということを感じ「もっと私も頑張ろう」と考えるようになるかもし

れないですし、こういう考え方もあるんだなという新たな視点を学ぶ機会にもなるかなと思います。さらに、学習者自身も、どこまで自分ができていて、どこからできていないのかなというところを把握する機会にもなってくるかも考えます。

課題が提示されている一方で、「オンライン授業はよかった」という意見も出ています。例えば自分のペースで学習できるとか、何回も見られる、復習しやすいという意見です。オンライン授業のよいところは認めて、従来の授業にうまく位置付けて継続して実施いくことが重要になると考えます。その際は、学習者は一つの科目ではなく、カリキュラムで学んでいるため、学習者がカリキュラムを選んでいく際に、自分にとってどういう授業が必要なのかをこれまで以上に検討することが大事になってきます。

7. オンラインの学習環境と学習支援

最後に、オンラインの学習環境と学習支援についてお話しします。授業の中だけに学習に従事するというのではなくて、アクティブラーニングは授業外の学習においても従事していく必要がありますよね。例えば、関西大学のラーニングコモンズでは、ゾーニングを意識してグループで学べるエリア、サイレントエリアをしっかり分けています。私は海外の大学のラーニングコモンズを視察に行くんですけども、シンガポールの南洋工科大学でもアクティブに学生が活動するエリアと静かに学ぶエリアと区切りがされていました。また、学習者が長く滞在できるように、リラクセスするようなスペースも設けておられるというのが特徴的でした。

学習環境では、アクティブラーニングがしやすいように可動式の什器を用意するとか、アイデアを表現できるようにホワイトボードを置くとか、長い間滞在できるように飲食ができる、あるいは気分転換ができる環境をつくること

考慮されています。什器もデザイン性のあるカラフルなものが入り入れられています。従来の図書館とは違い、各大学の特色を生かしたような思いの詰まった学習環境が構築されています。

学習環境は「ヒト・コト・モノ」から構成されています（加藤2001）。今紹介したのは物理的なものになりますが、これらの学習環境は、コロナ禍においては授業の実施状況に合わせて、閉室するか、時間を短縮して開室されていました（遠海2021）。その一方で、学習環境の中で実施される学習支援に関してはコロナ禍におきましても、継続してオンラインでの学習支援を展開する大学が目立ちました。

学習支援の一例として、ライティングセンターの活動を取り上げます。ライティングセンターは書く力の育成をサポートする組織です。約1割の大学にライティングセンターが今設置されており、年々増加傾向にあります（文部科学省2020）。ただコロナ禍では、そもそもライティングセンターがラーニングコモンズの中に設置されており、開室が難しいという状況に陥りました。北米では以前から非同期としてメールや音声等によるライティング支援が行われていましたが、日本では十分に普及しているとは言えませんでした。

そこで日本はどうなっているのかを調査してみました。4年制大学を対象に調査して、205大学から回答がありまして、そのうちライティングセンターを持っていた大学が55大学でした（岩崎2021）。質問内容としては施設、ライティングセンターの運用、相談内容の方向等について尋ねました。今回は55大学が回答したオンラインチュータリングに関する項目を取り上げます。

まず、ライティングセンターを立ち上げている大学が約半数、学習支援をするヘルプデスクとしてライティングを扱っている大学が半数ありました。これらの組織では日本語を扱っているというところがほとんどで、3割ぐらいが英

語も扱っていました。対象とする学生は学部生がほとんどなんですけれども、大学院の修士課程ですとか留学生を対象としているところも5割強ありました。

「オンラインのチュータリングをどうされていたのか」というところを聞いていきますと、74.5%の大学が「実施している」という回答をくださいました。「何がきっかけでオンラインを始めたのか」を尋ねますと、やはり「コロナの影響で始めた」というところがほとんどだったんです。そこで「どのようにオンラインで実施されていたのか」については、「SkypeやZoomを使ったりリアルタイムのチュータリング」が9割以上でした。複数回答可能となっているんですが「チャット」も2割ありました。あと「ネットワークの回線等を気にされて、文章でコメント機能を使って返事をする」という非同期のチュータリング実施も36.6%で、増えてきているかなと思います。やはり通信環境に配慮されてということかと思えます。これらの結果から、授業だけではなく、学習支援に関しても学習者が自律的に学んでいける環境の提供を各大学が検討し、展開していったことが見えてきます。

オンラインチュータリングと対面のチュータリングの効果について、知りたいという声もあるかと思えます。回答者に答えていただいたものですが、「同じ程度効果がある」が約半数です。一方、「やや対面のほうが効果がある、対面のほうが効果がある」が43.9%で、それなりの数があります。このあたりに関しては、どういうふうでオンラインチュータリングをされたのかによっても、異なってくるかなと考えており、引き続き調査が必要だと思っています。

本学でも、オンラインでチュータリングを開始しています。本学の場合はキャンパスがいっぱいあるんですね。千里山キャンパスは院生も多いので、月曜日から金曜日11時半から5時ま

で開けられるんですが、ほかのキャンパスは院生の数も千里山と比べて少ないですし、開けられて1日かなという状況だったんです。ですが、それだと学生はなかなか相談しにくいので、オンラインだったら千里山の学生と同じだけ支援を提供できるのではということでもいち早くやっていたんです。

ここに携わっている、チューターさんの話を聞いていると、例えば相談内容にいろいろな段階がありまして、テーマについて相談するという場合はイラストやマインドマップ等を使ったりと話をする場合もあったりしますね。そういうときは対面のほうが話をしやすいという意見が出たりもしています。その一方で、学習者が文章を書いており、それをベースに話す場合もあります。その時は、学生の抱える課題がわりと焦点化されているケースが多いので、オンラインでも対面のセッションとほとんど変わりはありませんという意見も出たりもしていました。

先ほどの調査で「オンラインチュータリングの特有の効果」について尋ねたところでは、「場所を選ばない、気軽に相談できる」というのがありました。あとオンラインの場合だと、画面共有しながら話をされる方が多かったので、「今、どこを話しているのかという情報共有がしやすい」という意見も出てきておりました。

課題として、チュータリングをするときは結構チューターさんが学習者の表情とかと見ているんですね。それで「相談者が分かっているのか、分かっているのか」を判断していました。またペンが動いているのかを見て、チューターが伝えたことをしっかりとメモをして、学生が自分のレポートに書き込んでいるのかというふうな情報を得ていることがわかってきました。ただ、それがオンラインだと少し分かりにくいところがあり、口頭で補うような形でセッションを進めていく必要性が見いだされました。

それほど回数は多くありませんでしたが、シ

ステムの不具合も見受けられました。そうしたトラブルが起きた場合も、本学の場合はチューターが臨機応変に対応して、工夫しながら進めていました。

オンラインチュータリングには効果も課題もあります。コロナ禍による感染状況が収まっても継続してオンラインでの学習支援は展開されることが予想されます。一方でライティングセンターを対象とした調査（岩崎2021）では、チュータリングをオンラインで実施していない大学もありました。その理由として「ノウハウがない」という声も上がっていたため、大学間によって今後共有をしていくことが求められます。

8. 今後の展開

これまでの話をまとめて今後の展開について取り上げていきます。ニューノーマル時代における授業設計、学習環境を考えるということで、授業設計の基本は変わらないので、授業の目標を達成する方法を考えていきます。学習者は一つ科目ではなくカリキュラムで学んでいますので、カリキュラムマネジメントとして、どんな方法で学んでいくのかということ、ある程度道順をつけていくことが求められると考えます。これは教員がいくらおぜん立てをしても限界があります。最終的には、学習者自身が自分が育成したい力を考え、その力を育むための方法として、授業科目を自分で選択していくことが重要になります。その選択を適切にするために、大学は情報を提供していくということが大事になってくると思います。

また、教えることから学ぶことへのシフトというようなところが入ってきます。教員が90分一方的に話すだけの講義を否定するわけではありませんが、そうした授業ばかりだと現在社会から求められているような能力を学生が育むことが難しいという状況になっていると考えます。講義型の授業は、教員が話したことをすべ

て学生が理解し、深く学んでいくことが必要となりますが、すべての受講生にそれを求めることはなかなか容易ではありません。このあたりを各教員が考えていくことで、授業の実施方法やカリキュラムマネジメントは変わってくるかなと考えています。

あと学生へのケアが重要ですね。例えば対面のグループワークの場合は、複数のグループの様子がパッと見て分かるんですけども、オンラインになると学習者のことを見るというところで、普段得られた情報が得られない。メモを取っているか、グループで全員が話しているか等、パッと見てというのがオンラインでは難しいです。そのため、従来の対面授業以上に、「学生がつまづいているとしたらどこなのか、内容なのか、やり方なのか、意欲なのか」というところを押さえていく。学生の情報や理解度を取得していくためには「学生にアウトプットをさせる」等が必要になります。

最後に、コロナ禍で今までとは違う社会になりました。外に出られないですとか、お友達と自由に会えないということです。これまでは全く違った社会になったことで、自分が今後どう生きていきたいのか、何を大切にしていきたいのか、どういう職業に就くのかということも含めて、生き方について考える機会になったのではないかと思います。私は教員なので、学習者の授業目標を達成するために授業を設計し、そのための学習環境を整備するのですが、自分がどう生きていきたいのか、そのためには大学でどう学んでいけばよいのかとかという声が学生からたくさん挙がってきて、お互いにそれを聞きながら授業をともにつくってけるとよいなというふうに考えています。ご清聴ありがとうございました。

付記：本講演で取り上げた内容はJSPS科研費JP19K03040、JP19H01710、JP20K03100の助成

を受けている。

参考文献

- 遠海友紀 (2021) コロナ禍の学習支援環境に関する調査について. 大学教育学会2021年度課題研究集会：34
- 石井英真 (2020) 「子どもたちの『学びを保障する』とはどういうことか」『教職研修』編集部 (編集) 岩瀬直樹・西郷孝彦・石川晋・中原淳・藤原和博・秋田喜代美・赤沢早人・石井英真・奈須正裕・田村学・溝上慎一・稲垣忠・平井聡一郎・平川理恵・梶谷真司・新保元康・木村泰子・山本宏樹・住田昌治・妹尾昌俊・市川力・小高美恵子『ポスト・コロナの学校を描く(教職研修総合特集 701号)』pp.62-70. 教育開発研究所.
- 岩崎千晶 (2022) 『大学生の学びを育むオンライン授業のデザイン』関西大学出版部
- 岩崎千晶 (2021) ライティングセンターにおけるオンラインチュータリングを考える. 大学教育学会2021年度課題研究集会要旨集：35
- 加藤浩・鈴木栄幸 (2001) 『協同学習環境のためのインターフェイス』加藤浩・有元博文編著『認知的道具のデザイン』金子書房
- 関西大学教学IRプロジェクト (2020) 「遠隔授業に関するアンケート」の集計結果について <https://www.kansai-u.ac.jp/ir/archives/2020/10/post-35.html> (2022年1月25日)
- 関西大学教学IRプロジェクト (2022) 「2021年度秋学期 授業・学生生活に関するアンケート」の集計結果について https://www.kansai-u.ac.jp/ir/student_survey_2021au_digest.pdf (2022年1月25日)
- 文部科学省 (2020) 平成 30 年度の大学におけ

る教育内容等の改革状況について。

https://www.mext.go.jp/content/20201005mxt_daigakuc03_000010276_1.pdf (2021年12月1日)

田口真奈 (2020) 授業ハイブリッド化とは何かー概念整理とポストコロナにおける課題の検討ー. 京都大学高等教育研究, 26 : 65-74

山崎直樹 (2021) 初級中国語のオンラインクラスにおける活動と評価. 関西大学高等教育研究, 12 : 157-163

